

# 遺跡調査室だより

その九、八幡山遺跡

## 第十三次確認調査の概要



■八幡山遺跡の高地性集落イメージ図



断面形がV字形の外環濠C

### これまでの調査概要

八幡山遺跡群は、弥生時代後期の八幡山遺跡と古墳時代の「古津八幡山古墳」の複合遺跡です。

日本海側最北の高地性環濠集落である、八幡山遺跡が廃絶された後に、県内最大の、古津八幡山古墳が同じ場所に築かれており、弥生時代後期から古墳時代という激動期の様相を示す東日本の典型的な遺跡として高く評価されています。

弥生時代後期(紀元後百年〜二百年ころ)になると、北陸地域にはムラどろしの戦に備えた防衛的集落が築られました。丘陵上に造られた高地性集落や、集落の周りに堀を巡らした環濠集落です。県内ではこれまでに二十力所ほどの高地性集落が確認されています。

八幡山遺跡の場合には標高五十以上の丘陵上に位置し、さらに

集落の周りに堀を巡らして

これまでの調査では環濠五条のほかに、竪穴住居三十七基や、方形周溝墓・前方後方形周溝墓(周りに溝を掘った墓)が検出されています。環濠は底が狭く、断面形がアルファベットのVの形上写真をしていきます。大きなものでは幅が三メートル、深さ二メートルあり、落ちると簡単には出られない深さです。遺跡推定面積は約四万八千平方メートルで東日本有数の規模です。

出土した土器には文様のないものと、縄目文様をつけたものの二種類がありますが、文様のない土器は北陸系、縄目文様の土器は天王山式土器といい東北系のもので、ほかの遺跡から北陸系・東北系の土器が出土することはあるのですが、八幡山遺跡のように両者がほとんど同じ比率で多量に出土することはまれです。八幡山遺跡では日本海沿いに北陸系土器、阿賀野川沿いに東北系土器がもたらされたものと考えられます。土器だけではなく、当然ヒトの移動・接触があったと思われる、それが友好的なものであったか敵対的なものであったかは難しい問題です。弥生時代から、新津は北陸・会津ルートとの交通の要所下図だったことは間違いないありません。

出土遺物には多量の土器のほか四十点以上の石鏃、石ででき



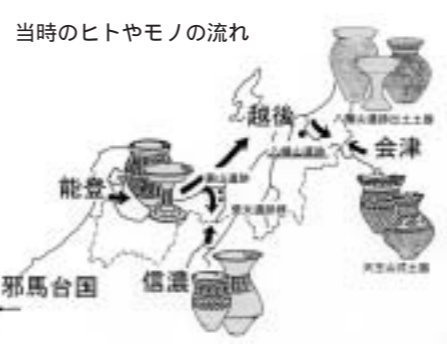
弥生式土器



石鏃

た矢尻・石斧・砥石・管玉・勾玉や鉄剣・鉄鏃などがあります。右写真。鉄剣は朝鮮半島製の可能性が指摘されているものです。

弥生時代の集落が営まれた数世代後の古墳時代前期になると、この地を平定した有力者の古墳が築かれます。これが古津八幡山古墳です。直径六十メートルのホタテ貝の形をした、県内最大規模の古墳です。古墳の南側には周堀がよく残っています。古津駅周辺に広がる舟戸遺跡が、古墳を造った有力者の治めたムラだったと考えられています。



当時のヒトやモノの流れ

### 第十三次確認調査

市では八幡山遺跡群を国指定史跡に申請するための準備作業を進めています。地権者や地元の皆さんのご協力のもと、平成十四年度には遺跡確認調査と遺跡地形測量を実施しました。

遺跡確認調査は今回で十三回目になり、六月三日から十月七日にかけて、県教育委員会・文化庁記念物課の指導のもとに行いました。まだ、遺物整理作業が終了していませんが、今回新たに分かったことについてお知らせします。

第十三次確認調査の目的  
遺跡の範囲を明確にすること  
外側の環濠(外環濠)のつながりを確認すること  
内側の環濠(内環濠)のつながりを確認すること

### 調査成果の概要

遺跡の範囲を明確にすることは、国指定範囲を決めるために最も重要なことです。今回東側と南側についてはおおむね遺跡の広がりを確認することができましたが、北側や西側の範囲を確定することができなかったため、平成十五年度に明らかにしたいと考えています。



内環濠Aと竪穴住居



外環濠B

環濠の土層断面の剥取り標本を地域学園二階の郷土資料室に展示してありますので、ぜひご覧下さい。

外環濠は全周せず、古津八幡山古墳を巻く外環濠Aと、約六十メートル離れた南側の外環濠Cに分かれることが判明しました。また、外環濠Aの南側には五メートルほどずれてつながらない全長わずか十五メートルほどの外環濠Bとなることが分かりました。外環濠Aの北側がどこまで延びるのかは今年度に調査を行う予定です。

内環濠は土橋を挟んで南側の内環濠Aと北側の内環濠Bに分かれることが判明しました。調査前には外環濠AとCがつながるものと予測していましたが、間が広く空くことは不思議でしたが、内環濠の位置がちょうど外環濠A・Bと外環濠Cの間を補う位置にあり、当初から計画的に造られたものと考えられています。

環濠はおおむね幅二・五メートル、深さ一・六メートルで、断面形がV字形をしています。末端の形状は、浅い逆台形となる所、末端に向かって浅い逆台形から浅くなる所、深さはほとんど変わらないのですが断面形がU字形になる所など、さまざまであることが分かりました。

内環濠Aの南東端部近くで、竪穴住居を壊して環濠が掘られていました。このことは、環濠よりも古い竪穴住居があったことを証明するものです。

### 遺物では、

直径四センチほどのコバルト色のガラス小玉や、稲刈りに用いたと考えられている石包丁が出土しました。ガラス小玉は他地域からもたらされたもので、石包丁は県内で二例目になる大変珍しいものです。また、環濠からは、コバルト色のガラス小玉や、稲刈りに用いたと考えられている石包丁が出土しました。ガラス小玉は他地域からもたらされたもので、石包丁は県内で二例目になる大変珍しいものです。



石包丁

環濠を発掘していると、二千年も前に、このような大規模な土木工事を行ったことに素朴に感じます。現在、移植コテやスコップで掘っても硬い土を掘るのは大変な作業なので、金属製の道具があったものと推測されます。

### 八幡山遺跡群遺構配置図



### 国指定そして史跡整備

平成15年度も遺跡確認調査を行う予定です。地権者や地元の皆さんにはご迷惑をおかけしますが、よろしくをお願いします。

八幡山遺跡は、環濠や竪穴住居の表示、竪穴住居の建物復元の整備がされています。また、隣接して県埋蔵文化財センターや県立植物園、新津市美術館がオープンし、一帯が「花と遺跡のふるさと公園」という新津市内の総合的な文化ゾーンとなっています。

市では里山の整備を計画的に進めていますので、史跡指定後の八幡山遺跡群の整備活用も、里山における動物や植物、昆虫などの自然とヒトとの結びつきという観点から考えていきたいと思